

#MeToo (私も被害に遭った) から#WeToo (私たちも行動する) へ——。米ハリウッドでの告発に端を発し、性被害について#MeTooと声を上げる動きは、日本でも広がった。一時的なブームで終わらせず、性被害や性別に対する偏見のない社会を目指そうと、若い世代が立ち上がっている。動き始めたのは、女性ばかりではない。

Dear Girls #WeToo

私たちは動く

痴漢被害 もう二度と

髪の毛を二つのお団子に結んだ少女が、顔の前に手鏡を広げている。背景には、「痴漢は犯罪です 私たちは立き入りしません」の文字。こんなバッチが、首都圏や関西の駅などで売られている。この「痴漢抑止バッチ」は一人の女子高校生が声を上げたことから生まれた。



♀女性が最初につけた手作りバッチ。岡崎明子撮影。昨年「痴漢抑止バッチ」に選ばれた岡崎「コンテスト情報サイト「登壇門」」から

3年前、関東地方に住む女性(19)は高校に入学した翌日から毎日のように、電車で痴漢に遭っていた。「体を触られる度に、自分の価値を下げられたような気がした」。2年生になった春、初老の男性の手を捕まえた。「この人痴漢です。誰か助けてください」。ホームで叫んだが、みんな見ぬ振り。相手から示

談を持ちかけられたが、断った。「もう二度とこんな思いをしたくない」。母親(51)と一緒に、警察官に連行される男性のイラスト入りで「痴漢は犯罪」と書いたカードを手作りし、かばんにおろ下げた。その日から、痴漢に遭わなくなった。警視庁によると、痴漢の約7割は電車と駅で起きてお



イベントで宣言を掲げる登壇者たち=3日、東京都渋谷区、山本裕之撮影

#MeToo 広げるために

#MeTooと声を上げた人を1人にさせず、性暴力やセクハラなど一切の暴力を許さない「これから」を作っていくために——。3日、都内で任意団体「#WeToo Japan」の設立イベントが開かれ、約120人が参加した。#MeTooを#WeTooに広げていくためには、どんなことが必要か。パネルディスカッションで、ジャーナリストの伊藤詩織さんは「性暴力やパワハラなど様々な暴力では、加害者だけ責めるのではなく、どう

いう背景があるのか、その人がなぜ暴力に走ってしまったのかを考えることが重要だと話した。ジェンダーや性暴力について考える一般社団法人「ちやぶ台返し女子アクション」代表理事の大沢祥子さんは、誰かを「許さない」と敵視するのではなく、「私たちはより良いコミュニティを作れるはずだ」というスタンスで身近な人や組織に働きかけていくことが、上げられた声を具体的な変化につなげていくために大切だと訴えた。



などの一部の売店などで1個540円で売っている。女性はカードをつけ始めた時、「恥ずかしいことをしないで」と同性からも批判されて孤独だった、と振り返る。「#MeToo」のよこごし声をあげることで社会は変わっていくと思いたい。

「性と生」10代から学ぶ

内閣府の調査では、女性15人に1人が異性から無理やりに性交された経験があり、約4割が10代以下だった。若い世代が性暴力の被害者にも加害者にもならないためには、適切な性教育が欠かせない。1月半ば、東京都港区の私立正則高校。1年生の「総合人間の性と生」の授業で、先生が#MeTooを取り上げた。同校の1年生は年間を通じて週1時間、刷り込まれる性・DVなどについて学んでいる。昨年末から今年初めの単元は、「支配と強制の性」。レイプなど性犯罪のデータや被害者の手記、裁判事例などをとくに、被害者への偏見が根強いことや、先生と生徒が力関係の差がセクハラ背景にあることを学んできた。

「性と生」10代から学ぶ。授業を担当する日沼慎吉校長(64)は「#MeTooは知っている人も、こうした現象が起きている要因や論点を提示しないと、高校生が自分の問題としてとらえるのは難しい。それを伝えるのは教育の役目」と話す。学校以外でも若い世代への啓発が進む。性暴力撲滅を啓発するNPO「しあわせなみだ」などは2月14日、サイト上で性に関する知識を学べる「Sexual Health Education」(検定)を始めた。検定には10の質問が並ぶ。「しあわせなみだ」の重要「A」指摘も。

性的知識を同世代に伝える活動を開始した男子大学生たちもいる。同意のない性的接触は性暴力で、相手の沈黙は同意ではない。都内の大学4年、淵上貴史さん(22)は昨年、性における同意の大切さを伝えるワークショップを学内で計10回開いた。「ちやぶ台返し女子アクション」の学生メンバーとして、性犯罪を厳罰化する刑法改正などに関わっている。男女がより良い関係になるために、知

観しない